

ブロニスワフ・ピウスツキ生誕 160 年記念

講演会『アイヌとヨーロッパの時を超えた邂逅』

～北日本の先住民族アイヌとポーランドの民族学者 B・ピウスツキ～

2026.7/18 (土) 13:30～

札幌エルプラザ 4F 中研修室 (北 8 西 3)

北海道ポーランド文化協会 (第 120 回例会)

どなたもご参加歓迎 定員 60 人

入場無料

参加方法 (予約推奨) ☎080-4071-0956 (安藤)

✉ hokkaidopolandca@gmail.com



主催：北海道ポーランド文化協会 共催：平取町立二風谷アイヌ文化博物館

ポーランドの優れた民族学者ブロニスワフ・ピウスツキの生誕 160 年を機に、リトアニアでアイヌ文化とピウスツキの業績を紹介する展示と交流イベントが行われています。ここではこの国際協働プロジェクトに関わった三人の講師を迎えて、この活動の様子、その目標・今後の展望などを語っていただきます。講演各 30 分、意見交換・質疑応答 30 分。

講師紹介

長田佳宏：平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長
 1995 年に平取町入庁後、平取町教育委員会へ出向。主に埋蔵文化財の保護及び平取町立二風谷アイヌ文化博物館・沙流川歴史館の学芸業務に携わる。2021 年から両館の館長に就任。2016 年以降ブロニスワフ・ピウスツキの没後百年記念事業 (2018 年) に関わる中で、ポーランドの博物館施設との連携を深め、北海道ポーランド文化協会にも入会。現在リトアニア、ポーランドと連携してピウスツキ生誕 160 年記念事業を展開中。



加藤博文：北海道大学アイヌ・先住民研究センター教授
 主要業績：共著『いま学ぶ アイヌ民族の歴史』『包摂と正義の地球環境学』『北太平洋の先住民文化』『イチからわかるアイヌ先住権』など。現在、先住民・文化的多様性グローバル研究ユニットにおいて、海外 5 研究拠点と連携した国際先住民研究のプラットフォームを立上げ、北海道と海外をつなぐ共同研究を展開中。



鶴澤加那子：トロムソにあるノルウェー北極大学 (UiT) で先住民族学を専攻し、2020 年に博士号を取得。国際労働機関 (スイス・ジュネーブ) の「原住民及び種族民に関する ILO 政策推進プロジェクト」(PRO169) でのインターンシップを経て、ノルウェー・オスロ大学歴史博物館研究員、ミシガン大学美術館およびリトアニア国立博物館アイヌ展のゲストキュレーターなどを歴任。アメリカ・バンダービル大学美術館ではアーティストとして「セント (匂い)」をテーマとした展示を担当。

現在は北海道大学アイヌ・先住民研究センターの招聘教員として先住民・文化的多様性グローバル研究ユニット (GRID) に所属し、GI-CoRE の協力教員も務める。先住民族の伝統知識や民具に関する研究と並行して、アイヌの伝統と現代のインスピレーションを融合させたアートインスタレーションに取り組んでいる。



リトアニア国立博物館で行ったアイヌの文化交流

平取町立二風谷アイヌ文化博物館館長 長田 佳宏

2026年2月5日～8月2日の約6か月間、リトアニアの首都ヴィリニュスに在るリトアニア国立博物館の分館・ハウス オブ ヒストリーズで、同博物館と平取町立二風谷アイヌ文化博物館が協働する国際展覧会「"Žmogus tarp pasaulių" A soul between worlds. Indigenous Ainu in Northern Japan and ethnographer Bronisław Piłsudski 世界の狭間にある魂：北日本の先住民族アイヌと民族学者ブロニスワフ・ピウスツキ」が開催されています。

1. ブロニスワフ・ピウスツキの功績の紹介

近年、リトアニア及びポーランド国内では、とりわけピウスツキが行った少数民族調査、社会活動等を再評価する機運が高まっています。氏が行ったアイヌ研究は、その多くが樺太アイヌに関する成果ですが、幾度か行われた北海道アイヌに関する調査も特筆に値します。1903年夏にはロシア帝室地理協会北海道アイヌ調査団の一員として渡道し、主に白老及び平取コタンでアイヌ調査を行ないました。平取では地域住民の肖像写真が30人以上撮影され、さらに被写体の名前も記録されています。またヴァツワフ・シェロシェフスキによる紀行文も残されていて、調査の全体像や住民との交流の様子を知ることができます。

展覧会では、ピウスツキの生涯を親しみやすく伝えるための試みとして「パイカワ」という北海道アイヌの少女を創作し、ストーリーテラーの役割を与えています。



2. 平取町民によるアイヌ文化の普及・交流*

2026年2月27日～3月1日の3日間、リトアニア国立博物館に平取アイヌ文化保存会会員13名を派遣し、アイヌ文化の普及と交流（アイヌ文化ウィークエンド）を行ないました。この一連の活動には北海道大学の加藤博文教授、鶴澤加那子招聘教員にもご参画いただき長田と共にプログラムを実施しました。

保存会の活動としては、アイヌ文様の切り絵、アイヌ口承文芸、アイヌ古式舞踊、アイヌ文様の刺しゅう、保存会の活動紹介、アイヌ料理ワークショップが行われ、



加藤、鶴澤両氏と長田による講演、ドキュメンタリー映画

『Ainu | ひと』『フィシスの波文』の上映と合わせて11のプログラムが行われました。3日間のプログラムで参加者は約500人、期間中の展覧会来場者は約900人でした。

普及・交流事業の中で、参加者の意見や感想を聞いたところ、多くの参加者はアイヌ文化の予備知識はないが、異文化体験に興味があって参加したとのこと。リトアニアにキリスト教が伝来する中世以前は、自然への崇拝が生活に根付いていたこともあり、宗教的な観点からアイヌ文化に対する親近感をもったという参加者もいました。

3. さまざまな縁を大事にして

リトアニア国立博物館と保存会のこうした文化交流は、ピウスツキらによる北海道アイヌ調査がもたらした縁によります。平取町のような小さな町にリトアニア国立博物館が協力関係を依頼したのも、アイヌの伝統が色濃く残る地域性が評価されたからです。町の人口規模や経済力だけで平取町の価値ははかれません。そのことは1903年にピウスツキらが平取を調査地に選んだのと同じ理由と考えられます。



本展覧会は8月2日に閉幕し、つづいて本年9月～2027年3月にポーランドのスレユヴェク市に在るユゼフ・ピウスツキ博物館へ巡回します。今回お世話になった関係者との縁を大事にしながら、スレユヴェクでもアイヌ文化の普及事業を進めます。



(おさだ・よしひろ、会員)

写真(左中) 展示案内の北海道アイヌ少女パイカワ
(左下) 国際展オープニングで鶴澤氏と長田、講演で加藤氏
(右下) 保存会によるクリムセ(弓の舞)、アイヌ料理ワークショップ